
銀雷の魔術師

天城 誠司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀雷の魔術師

【Nコード】

N2846Y

【作者名】

天城 誠司

【あらすじ】

主人公は、トラックに轢かれる少女をかばって死んでしまい、目覚めると異世界だった。転生した主人公、アルは非常に珍しい<雷>属性を得て、何をするのか。

初投稿で、処女作です・・・駄文ですが楽しんで頂ければ幸いです。

第1話：転生、そして魔術

1

ある日、学校の帰り道にそれは起こった。

歩道に、俺のいる場所に突っ込んでくるトラック。

直撃コース。

避けられたはずだ、反射神経には自信があった。

でも、俺の隣に少女がいた。

勝手に体が動いていた。

目が覚めた。

体がほとんど動かない。

病院かと思っただが、なにか違う。

そう、これは

俺は死んだらしい。
俺の体は赤ん坊になっていた。

2

『ごめんね』

いつか誰かが、俺に言った言葉。
死んだショックからか、記憶が少し曖昧になっていた。
こっちの世界で聞いたかもしれないし、前の世界かもしれない。

死んだはずの俺は、何故か多少の記憶を持って転生していた。

天城あまぎ 誠司せいじが俺の名前だった。

今の俺は、アルネア・フォーラスブルグ・・・
なんと、貴族である。外見も前世とは違う。
金髪で緑の眼である。
家族からはアルって呼ばれる。

仲の良い父と母、1つ上の兄のリック、そして俺と双子の妹のリリ
ィ。
リックもリリーも愛称で、本名はリベルクとリリネアである。
ちなみにリリーと俺は似てない。
双子なのに。

むしろ兄と妹のほうが似てると思う。
まあ、多分俺は祖父母にでも似たんだろう。
会ったことないけど。

何はともあれ、今、俺は5歳になった。
せっかく転生したんだから、なにかしないと損である。
まあ、生まれた頃から俺は天才ぶりを発揮していたのだが
(何を隠そう、この世界の法則は一部除いて前世とほぼ同じ！しか
も、なんと言語が日本語という、ステキ仕様だったのだ！)

そう、せっかくだから最強を目指したりとか楽しそう。

3

この世界には秘儀がある

そう、さっき言った一部の例外 魔法である。

魔法がある世界で最強を目指すなら、是非覚えたい。

「ちちうえー、まほうってなんですか!？」

子どもは大人より力が弱い。

これは仕方ない事だ。

だが、幼い子どもには、可愛さという最強の武器がある !

「よし、わかった、この父上に任せなさい！」

うん、楽勝だった。

まあ、いいよね？

「いいかい、アル。魔法を使うには魔力が必要なんだ。」

まあ、よくあるね。

ちなみに俺の愛称がアルなだけで、べつにエセ中国人お父様では無いので悪しからず。

「ただし、魔力がなくても、魔法が使える魔法剣もあるんだ。

逆に魔力が無いと使えない魔法剣もあるんだけどね」

魔法剣・・・やばい、すごい欲しいよ。

きつと聖剣とか魔剣とかあるに違いない!

「ちちうえ、まほうけんって、めずらしいものなのですか?」

「そうだね・・・今はこの国に大体300本くらいかな・・・
もっとあるかもしれないけれど」

この国というのは、ラルハイト皇国のことである。

ラルハイト皇国は最上位に皇がいて、その下に十二貴族と呼ばれる準王族。

その下に普通の貴族。その下に下級貴族。その下に平民となっている。

魔法剣というのはただの剣にあらず。

前世ではありえない効果を魔法で実現する。

有名どころで、超軽量化、超重量化や、刀身が伸びたり、光ったりするらしい。

さらに魔法剣の上に、精霊剣と呼ばれるものまであるらしい。

なんでも、剣に精霊が宿っていて、意思の疎通まで可能だとか。

この国の皇と十二貴族は、結構精霊剣を持っているのだとか。

言い忘れていたが、この父上、親バカだが、十二貴族の一人である。まあ、十二貴族の中でも発言力はないほうらしいのだが。

精霊剣は長男のリック兄さんが受け継ぐ。

でも別に悔しくない。だって、リック兄さんはすごい良い人なのだ。

我が家のしきたりとして、5歳になったら外出がある程度自由というものがある。

んで、リック兄さんは出かけるたびに、俺とリリーにお土産を持って帰ってきてくれたり、

暇な俺に本を貸してくれたり、暇な俺の話し相手になってくれたり、俺の苦手なトマト のような物体 を代わりに食べてくれたり、偉ぶらないし、他の人にも優しいし e t c . . .

そんなわけで他に精霊剣入手法について父さんに聞いてみたが、

「精霊剣には強力な精霊が必要からそんなに本数はないんだよなあ .

. .

お、そうだ。魔法剣の基本能力として、魔力をチャージしておいて、いざという時に使える

っていうのがあるんだ。そして、魔力を一定量以上溜めた魔法剣に、

精霊が宿って精霊剣になることがあるらしい。見たことないけどね」

別にいいけど、5歳に話すには難しい話な気がする . . .
でもとりあえず、魔力がいかに大事かわかった。

「ちちうえ、ありがとうございました！」

魔法剣はある程度の良い剣に魔力を込めればできるらしい。
よって一番の課題は、俺の魔力量である。

んで、この国の貴族は一樣に高い魔力を保有し、さらに十二貴族はトップクラスである。

って本で読んだ俺の行動は既に決まっている !

「ちちうえ、まほうをおしえてください！」

そう、俺も十二貴族の次男なのだから、魔力もすごいに違いないのだ！

「うん、アルにはちょっと早い気がするんだけど・・・」

まあ、母さんに相談してみるよ」

「ちちうえ、まほうがつかいたいです・・・」

父はとても困っている。ものすごく珍しい。(いつもすぐOKする)というか初めて見た。

もしかすると、早期に魔力を使うと悪影響 とかの話があるのか
と思ったので一旦撤退。

俺は書齋に侵入して初心者向けの魔法に関する本を探す

『上級魔法大全』、違う、さすがに無理だろ。

『火魔法応用！おいしいパンの焼き方』、魔法のイメージが庶

民的に・・・。

『モテる！魅力魔法』、・・・これ、まさか父さんは使っていないだろうな・・・

『ダイエットの魔術！一日30分で劇的変身！』、魔法なのか！？なんか違うだろ！

『魔法を使う生物とその歴史』

なんか気になって手に取った。

『魔法を扱う生物、その代表格は人間、エルフ、ドワーフ、竜人、獣人等の人型種族、

そして言わずと知れた精霊、そしてドラゴンである。』

そう、この世界にはエルフやドワーフ、果てはドラゴンまでいたのだ。

さて、今回は前世の記憶が災いしたらしい。

いままで読んだ本、歴史について書いてあった本とかに、ドラゴンやエルフがたびたび

登場していたのだが、子ども向けなんだろうと思って気にしなかった。

その割りに内容が難しいなーと思っていたのだが、どうやら子ども向けじゃなく、立派な歴史書だったらしい。

つい先入観がね・・・

『ここで大切なのが、人間は大陸の大部分に国を作り、領土を広げているが、

人間は魔術的には強い種族ではない。身体能力も同様である。

ただ数が多く、また、ほかの種族が領土を広げることには拘らない

為である。

これはアイリア暦300年のラーベルグ防衛戦以外、他種族との大規模戦闘がないことから言える』

ラーベルグ防衛戦・・・

これは御伽噺の本　だと思っていた歴史書で読んだ。

ラーベルグはこの大陸　アイリア大陸の北東に位置する国である。ちなみに俺のいるラルハイト皇国は大陸北にあり、ラーベルグから西にある

のだが、その間にはティルグリム山脈という超がつく難所があり、死の森とかもあるので、ダイレクトにくるのは不可能と断言している。

そのラーベルグに突如、<グリディア>という黒いドラゴンが襲来し、ものすごい被害が出たらしい。

なぜ突然襲撃されたかは謎だが、英雄ラーベルグと、その仲間たちが<ティルヴィンケ>を筆頭とした精霊剣10本で撃退したらしい。

なんでも、ドラゴンの炎で草原は一瞬で灰になり、城壁は蒸発したとか、

<ティルヴィンケ>が氷の壁を出して、その極悪な炎を防いだとか、なかなか信じがたい。

まあ、黒竜にはほとんどダメージを与えられず、黒竜が飽きたために撃退できたんだとか。

しかも、ラーベルグは死んでしまったらしいが、それでもドラゴンの撃退はすさまじい事らしい。

そのあと、本来の目的を思い出した俺は、『初めての魔法』なる本を発見した。

6

「うーん、ない。まったく問題ない・・・」

『初めての魔法』を読んだのだが、小さい子どもが魔法を習っても全く問題なさそう。

というから歳くらいから教えることもけっこうあるとか。

なんで困ってるかというところ、問題無いなら、あの親馬鹿父上が教えてくれないのは、

なぜかということである。

でもまあ、手はあるんだが。

「にいさーん！」

「ん？なんだ、アル。どうかしたのか？」

「にいさん、まほうっておそわった？」

「ああ、すこしだけな」

「にいさん、ぼくにもまほうをおしえて！」

「なんだよ、しょうがないなあ・・・父さんが教えてくれなかったのか？」

ま、それなら仕方ない、父さんには内緒だぜ？」

やっぱり兄さんは頼りになるぜ！

そんな訳で、俺と兄さんは庭に来ていた。

二人で周囲を確認。

庭は広く、剣術等の練習用の、木に囲まれた広場があるのでそこを使う。

「よし、オッケー。それじゃあ、魔法の使い方・初心者コースな」

「よろしくおねがいます！」

「まず、手のひらを前に出す。そして、手に魔力を集中する。そして、どんなことを起こしたいのか明確にイメージして力を解放する。それだけ」

「にいさん・・・」

すごい曖昧だった！

というか呪文は！？いらないのか？

「あ、そうそう、よりイメージしやすくする為に呪文がある。

単に補助するだけだから、本当は要らないハズんだけど、みんな使っな」

「へー、そうなんだ・・・」

「そうなのさ、んで、我が家流のファイヤーボールの呪文が・・・

『炎の弾丸よ！<ファイヤーボール！>』って感じだ」

兄さんの手から真紅の弾丸が4つ出てきて的用に置いてあった岩に
激突。

岩が焦げた。なかなかの迫力。強火並みである。

「さすが兄さん！」

「ふふー。おっと、そうだ。人によって得意な魔法属性があるらしい。

ちなみに俺は<炎>な」

もちろん、こんなの見たらやるっきゃない。

「よし・・・『炎の弾丸よ！<ファイヤーボール！>』」

何か不思議な、水のような何かが手に集まるのを感じた。

そして、一瞬それが熱くなったような気がして、俺の手から火の弾丸が飛び出した。

それは、2つしかなく、兄さんのより速度も遅く、小さかったけど確かに火だった。

でも、不思議なことに、その火は白い色をしていた。

なんというか、白い炎ってすごい変な感じだね・・・
あと、兄さんより明らかに火が弱いのがなんか悔しい。

「やるじゃないか、アル」

「むう・・・兄さんのほうが、火が強いし数が多いし、速いし大きいじゃんか」

「いや、アルは得意属性が違うかもしれないぞ？
それに白い炎ってカッコイイじゃん？」

うん、たしかにこの珍しそうな色は若干嬉しい。
でも、ポケモンとかだと、色違いでも能力に差はないのだ・・・
で、得意属性は読んで字の如く。得意属性なら強力になるらしい。
と、そこに思わぬ来客。

「はあ、やはりアルがリックに魔法を習っていたか」

お父様登場である。

「あ、父さん。まずかった？」

「とうさんー、まほうつかえたよー!!」

まさかとは思うが、怒られると嫌なので純真無垢っぽくしておく。
あと、父上ってなんか堅苦しいから、兄さんに倣って父さんにして
みる。

「おおつ、流石アルだ、そしてリックも、もう教えられるようになってたのか、すごいな！」

なんか父さんが若干ホツとしている気がする。
どうやら心配されていたようだ。

「まあ、アルはほとんど教える手間がかかりませんからね。」

6歳なのに謙遜を忘れない兄さんは大人だと俺は思った。

7

そんなわけで、俺の得意属性探しが始まった。

「水の弾丸！<ウォーターボール！>」

「切り裂く疾風の刃！<ウインドカッター！>」

「大地の弾丸よ！<ロックブラスト！>」

どれも代わり映えしない気がする・・・
兄さんみたいな迫力が無いのだ。

得意属性が無いのかなあ、と思ったのだが、父さん曰く
「魔力がある以上、それは無い」
とのことで、3人で唸っていたのだが

「どうしたの、3人揃って」

「おお、クリス。実はアルの得意属性を探しているんだが、四大属性ではなさそうなんだ」

クリスって母さんの名前ね。ああ、そうそう。

俺の家族はみんな金髪で緑の眼をしている。

あ、父さんの名前はアルベルクね。

「そうですか、では、他のも試してみましようか」

母さん曰く、四大属性以外の使い手はほとんどいないが、一応あるとのこと。

でも、問題がある。

「クリス、呪文はどうする？」

曰く、四大属性は相性に関わらず一応使える（威力等はおちる）が、それ以外は相性が悪いと発動すらしらないそうで、呪文が広まらないとのこと。

四大以外の属性の有名どころは、<光>、<闇>、<氷>、<雷>、<治癒>とのこと。

十二貴族でも稀にしか四大以外 特殊属性持ちは現れないらしい。あと、今5歳の皇女様が<光>属性なんだとか。

とりあえず、呪文を考えてみることに。

（確か、明確なイメージを持てればいい。だったかな）

「アル、どうする？父さんも考えるのを手伝おうか？」

確かに手伝ってもらったほうが効率もいい。
でも、その前に。

「とうさん、いっかいだけ、ひとりでやってみていい？」

「ふっ、アルも男の子だなあ・・・頑張れ〜応援してるぞ」

「アル、兄ちゃんも応援してるからな！」

「うふふっ。アル、頑張ってるね」

よし、やるぞー！

一番の問題はどの属性を試すのか。
でも、なんとなく決まってる気がした。

「空を切り裂く天の雷よ 我が手に集え！<サンダーボルト

！>」

目の前が一瞬、真っ白になった。

すさまじい轟音が響き渡り、的だった岩は跡形もなかった。

<サンダーボルト>には致命的な欠陥があった。
というか、<雷>属性が俺にとって問題だった。
修正しようにも練習すら問題だった。

別に威力うんぬんではない。消費魔力が多すぎるのも・・・
まあ、いい。<ファイアボール>が軽く見積もって10発は撃てる
と思う。

音が大きいのは原因の一つだが。

一番の問題は・・・

「おにいちゃん、こわい・・・ぴかってひかって、すごいおおきな
おとがしたの・・・かみなり?」

妹のリリーが怖がるのだ

・・・色々意見はあると思うけど、妹は（まだ）純真無垢に育っているんだ！

もし妹が<サンダーボルト>のせいで荒んだらすごい嫌だ。というか、最悪、リリーに嫌われるかもしれない・・・

そう、<サンダーボルト>は手から雷を出す技であり、子どもは雷を怖がることも多い。

で、この世界に防音なんて技術はない。

そして、雷の音は相当遠くまで聞こえるのである・・・

これは困った。

が、問題はあっさり解決した。

というのも、母さんが、

「ちゃんと音を小さくってイメージすれば大丈夫なのよ？」

っておしえてくれたのだ。

実は、母さんは昔、城の騎士団の魔術隊に所属していて、『水幻の歌姫』とか呼ばれていたらしい。

父さんに出会ったのも騎士団だったとか。ちなみに父さんは『紅蓮の悪魔』だったとか。

父さんはカッコイイから、悪魔には見えないうって言ったら、父さんが母さんに笑われていた。

一体何をしてたんだ、父さん・・・

兎に角、さっそく実践。

呪文なら色々思いつくし！

あ、厨二病じゃないんだからな！そういう世界なんだ！

げふん、げふん。えーと、音は小さく。電気・・・<ファイアボール>みたいなのでいいか。
ならくサンターボール>だな。

魔力を右手に集める。右手が薄く白い輝きを持ち

「雷の弾丸よ！<サンダーボール！>」

バシユッ

バチバチ

（おおっ、音小さい！なんかバチバチしてるけどこれなら大丈夫だ！）

「おにいちゃん、なにしてるの？」

俺は、とっさの言い訳は思いつかなかった。

「え、えっと、まじゅつのれんしゅう？」

第1話・転生、そして魔術（後書き）

こんな作品を読んで下さった方、ありがとうございます。

第2話：朝は戦いの刻

1

さて、落ち着こう。

俺の魔法属性は珍しい<雷>だった。わーい。

しかし、俺の<サンダーボルト>の光と音に驚いた妹・リリーが怯えてしまう。

俺はリリーに気づかれず、また、魔術の練習とバリエーション強化のためにこっそり特訓することにした。

しかし、<サンダーボール>を撃つところをリリーに見られてしまったのである。

「おにいちゃん、なにしてるの?」

選択肢 1、ごまかす

2、あやまる

3、にげる

ここはもちろん

「えーと、まじゅつのとつくん・・・ごめんね、リリー。
さっきのかみなりは、おにいちゃんのみじゅつだったんだ・・・」

謝るしかないじゃないかっ！

「そう・・・だったんだ・・・」

・・・やばい？

「もう、おにいちゃんがかみなりで、おケガでもしたらたいへんだとおもって

しんぱいしたんだよ・・・」

妹は心が広がった！

とりあえず、謝ったらリリーは許してくれた。なんてできた妹なん

だ。

ただ、「おにいちゃんだけずるいつ」

とのことでリリーも父さんから魔術を教わる。

なんと得意属性は<治癒>で珍しい・・・とはいっても母さんも<治癒>属性らしい。

同じ属性だと、なんとなく感じるとのこと、すぐ判明。

あと、得意属性は2つ以上ある場合もあるらしく、母さんとリリーは<水>も得意だった。

「リリーだけずるいつ」

つていつてみたものの、<治癒>は特殊属性のなかでも抜群に多いらしい。

(それでも四大属性と比べれば圧倒的に少ないのだが)

その後、リリーがいないときに、雷のほう珍しいといわれた。

十二貴族でも雷持ちはいたようになかったような？という感じらしい。

少なくとも、今はいないとのこと。

さて、問題はリック兄さんである。

リック兄さん不遇じゃん！

そう思ったのだが、父さん曰く

「あー、じつはリックは<火>じゃなくて<炎>だからな」
いまいち違いが分からなかったが、要は強力らしい。
さすが兄さんだ！

あと、属性は魔法を使い込むことで上級属性になったり、特異属性に変化するらしい。
で、<火>の上位が<炎>と。生まれつきは珍しいらしい。
って言いつつ、父さんも<炎>属性で、兄さんもリリーも思いつきり遺伝である。

俺の<雷>はこの家ではでたことが無いようだが・・・
転生の影響だろうか？

2

さて、俺は朝起きるのは得意じゃない。
今は二の月三日目、つまり二月三日。まだ寒い。布団が恋しい。

季節とか、月とか、曜日まで前世と同じ。俺の誕生日は1の月の6日目。

昨日、二の月2日目の朝は・・・

「ふはははは　我が鉄壁の布団ディフェンスを打ち破れるものな
どいないっ!」

「むむう、おにいちゃんのくおふとんでいふえんす>がやぶれない
わ!」

「おおつ、アル、リリー楽しそうだなっ、俺も参加だー!」

「むうつ、だがたとえリック兄さんでも我が布団ディフェンスは破
れまい!」

「はっは、このリック兄さんをなめるな!へい、リリー!」

「あ、わーい!」

リリーが喜ぶ声がある。なんだろう、俺の直感が危険を訴えている。
・・・!?

「くうつ、布団ディフェンス中は外が見えないのが欠点か!」

「「ひっさーっ！リリーばくだん！」」

本気で危険を感じ、布団の外を覗くと・・・

空中に舞つりりー・・・というか兄さんに投げられてこっちに飛んでくるりりーの姿が

「ぐはっ！」

兄さんによってりりーは的確に俺の腹の上に着地。

俺は悶絶するしかなかった・・・

さらにりりーが申し訳なさそうに見てきたら怒れるハズも無い・・・

「や、やるな・・・りりー、そして、兄さん・・・がくっ」

27

という微笑ましい？感じだったのだが、

今日、二の月三日目は・・・

「おにーちゃん、あさですよー！」

「ふっ、りりー。真っ暗じゃないか。まだ夜だろうっ？」

「むう、おにーちゃんがくおふとんでいふえんすゝしてるからでし

よー」

「ふははは この鉄壁の布団ディフェンス、破れるものなら破ってみよ！」

「わかりましたっ、おにいちゃんでもようしゃしませんっ！」

戦いの火蓋が切って落とされた !

布団ディフェンス

布団に潜り込み四隅を内側に引き込み、それを体重で押さえ込むことで鉄壁の防御を実現。

弱点は、防御力は1布団ポイントしか上昇せず、外が見えないため、反撃できない。

よって、チャージ技や、高威力の攻撃に弱い。

だが、リリーは攻撃力が低いので破るのは難しい。

「えいっーーーーー！」

リリーが布団を引っ張る！だが男の・・・兄の意地で負けられない！兄のプライドを守るため、俺は全力で布団に引きこもる ツ！

「うおおおお ツー！」

「そんなっ、おにいちゃんはどこにそんなちからが!？」

「負けないぞリリー!あと5分・・・あと5分だけでもッ！」

「うつつ、さすがおにいちゃん・・・！」

でもっ、リックお兄ちゃん、じきでんのあのわざなら・・・！」

俺は直感した、あの・・・恐怖の必殺技の再来を・・・

「えいーっ!リリーばくだんっ！」

ベッドに乗り込んだリリーが足に力を溜め、空へ舞い上がる
!
このままではやられる　ッ!

「うおおおッ!なめるなあああ！」

布団の四隅をつかみ、布団を死守する布団ディフェンスでは、布団の守備を貫通し、

俺にダメージを与える<リリー爆弾>を防げない

コンマ一秒で判断した俺は賭けに出る　!

四隅が完全に内側に潜り込み、奇岩のようだった布団が一瞬で姿を

変える！

「うおおおっ ！<布団バリアー！>」

布団を横に引つ張り、張り詰めさせることで布団の限界を超えた防御を可能にする ！

だが、この代償は大きい

「ぐああああッ ！寒い！冷気があああ！」

そう、寒いから布団を被っていたのに、その守りがなくなるのだ！

「むっっ、そんなくおふとんばりやー>でとめられるとおまっのっ！？」

「ふんっ、この守りを破ってから言ってみせる！」

リリーが布団と激突する ！

ドガアアアン！（想像上の音です）

「そ、そんな・・・」

リリー爆弾によって布団バリアーは、もはや原型をとどめていなかった・・・

クレーターのよ様に中央が凹んでいる。だが・・・

ほぼ全て 推定90%の威力の減衰に成功。
俺へのダメージはほとんどなかった。

「ふはははは・・・はつくしよん！ くっ、寒いぜ・・・だが・・・！」

アルは布団を被って再び布団ディフェンスを展開する ！

「この布団ある限り、俺は負けない！負けられないんだあああッ！」

「わたしだって・・・ぜったい、おにいちゃんをおこすんだもん！」

奇妙な感じがする

以前のくリリー爆弾>の時とは、また違う。

これは・・・魔力！？

「おいなるみずよ、おにいちゃんをおこして！<うおーたーばーる！>」

まずい！極限まで集中！

思考を加速させる！

どうすれば！？

- 1、魔法で迎撃
- 2、布団バリアー
- 3、にげる

駄目だ！攻撃魔法しか持ってない！

<サンダーボルト>なんて撃つたらリリーが死んでしまう！

布団バリアーで<ウオーターボール>は防げない！

防いだら布団がびしょ濡れ　ッ！悪夢だ！

事実を言ってもリリーが俺を庇ったようにしか聞こえないだろう！

ならこれしかない。

「うおおおおおっ　　！」

布団ディフェンスを解除！ここまでコンマ三秒　　！（俺主観）

そのまま跳ね上がるようにベッドの外へ　　！

「きゃっ」

「ッ！しまった！」

迂闊だった。

俺は焦っていたようだ。

最後に布団ディフェンスを使った時、リリーがいた場所は？

リリー爆弾を使った後、そのまま俺の上に乗っかっていたのだ。

重さで気づけよって俺も思ったが、リリーは軽い。俺は焦ってた。

エラー！布団ディフェンス、解除できません！

リリーが期せずして布団をホールドしているため逃げられない

バシャアアン

痛みは、無かった。ちゃんと弱めに撃つてたらしい。さすが我が妹。だが、どうしていいのかわからなかった。

寝巻きと布団がびしょ濡れなのだ。

転生したといっても、周囲からすれば俺は5歳児……

そんな子どもの布団が朝びしょ濡れだと……

うおおおおおっ

どうしていいのかわからなかった……

結論からいうと、俺は助かった。
あんまり遅いので、兄さんも起こしにきたのだ。
で、扉をあけると、俺がくウォーターボール（威力控えめ）>を喰
らったところだった。
んで、

「炎よ、布団を乾かせ　！<ファイヤ！>」

ポオオオオオツ

「さすが兄さん！これで大丈夫だー！」

兄さんはドライヤーから溶鉱炉まで完璧のようだ。
んで、リリーは・・・

「おにいちゃん、ごめんなさい・・・」

「おう、大丈夫さ！兄ちゃんも全然起きなくてごめんな」

「うん！」

仲直り完了。

よし、<ご飯>　<ご飯>

おっと、寝巻きのままだった。

ご飯を食べたあと、父さんに体術の稽古してもらった。
そして

「よし、リック、アル、リリー。みんなで村に出かけるぞ」

第2話・朝は戦いの刻（後書き）

こんな作品を読んで下さって、ありがとうございます

第3話：銀の雷

1

フォーラフブルグ家。

この世界での俺の家である。

あんな父さんだけど（気さく、優しい、親馬鹿、新婚みたいe t c .
・・・）

一応、十二貴族とかいう、皇国でも皇を除けば最高に偉い貴族らしい。

でもまあ、貴族には見えないけど、間違いなく良い人ではあるな。

で、そんなフォーラスブルグ領の東端に、オル村はある。

ウチの領土は皇国の東端。その東端なので、皇国最東端の村である。
なので、村から少し東に行けばティルグリム山脈がある。

えーと、あのラーベルグ防衛戦の竜が住んでたっていう山脈である。
・・・まだ生きてたりするのかな？

話が逸れた・・・ウチの屋敷は領土の東寄りに建ってるので、村ま
で馬車で30分くらいで着いた。

推定午前10時。3時くらいになったら帰るらしい。

えーと、今回の目的は領土の視察らしい。

「村の子と遊んでおいで」とのこと。

さて、村に着いた。

思ったより立派な村である。

家が1、2、3、4、5、6、7、8、9・・・

いっぱいあった。

仕方なかったんだ・・・多いんだもの！

とりあえず父さんが村長さんの屋敷で話てる間に村に子どもと遊ぶことに。

「よし、それじゃあ、かけっこで勝負だ！」
と、村の子ども達のリーダー格であるジヨン。

「よし、受けてたつぜ！負けないよ、兄さん！」
俺は受けてたつ！

「えっ、俺もか!？」

兄さんはノリがいいから、こうすれば・・・

「ふははははっ！いいだろう。アル、この兄にかけっこで勝とうな
ど・・・10年早い！」

「ルールは簡単。ケガをさせたら反則負け。他は何でもOK。
あそこの目印付の木に先についた人がトップだ！」

「ふぶん、ジヨン、兄さん、負けないよ！」

「ほお、なんでもいいのか・・・」

「おにいちゃん、がんばれ〜！」

そして村の少年Aの合図で死闘は始まる。コースは直線150M)
俺主観)

「いちについて、よい……ドーン！」

始まる瞬間、俺は失策を悟った。
魔力を感じたのだ。

「大地よ、壁となれ！<ストーンウォール！>」

「紅蓮の炎よ！貫け<ブレイズアロー！>」

ズガアアアン！

地面から突然壁が現れ行く手をふさぐ！

バシユウウン！

紅蓮の矢が兄さんの前の壁を一瞬で溶かす！

いまから詠唱してたら出遅れる！

なら！

俺は全力で壁にダッシュ！
膝を曲げ、全力で 跳ぶ！

「うおりゃああ ツ！」

そしてそのまま、ゴツゴツした壁に手をかけて一気に登ろうと

あれ？

今まで、転生してから全力でジャンプしたことがなかった。
稽古も、まだ本当に全力でやったことはない。

というか、いままで一番全力だったのが、朝の布団防衛戦・・・
そんなわけで、いま気づいた。

（体が、軽い ！）

俺の体は2Mもの（俺主観）壁を軽々飛び越えて、前の二人に追いついた！

「うわっ！？魔法か！？」

「おっ、さすがアルだな！」

「おにいちゃんすごい！」

「まだ、勝負はこれからだ！今度は俺もいくぜ！」

そして、気づいた。前方の地面に魔力が集まっている。

これは！

感じた。地面が陥没する。雷では対処不可。なら　！

「崩れる大地は侵入を拒む！<グランドクラック！>」

「紅蓮の業火は大地をも溶かし固める！<ブレイズフレア！>」

「風が我が身を支え、風が我を運ぶ！我は空翔る一陣の風！<ウイング！>」

大地が崩れる。

炎が大地を溶かし、崩れるのを阻止しようと

「うあちっちちちち！？」

地面がドロドロ・・・というか溶岩になっていた。

たしかに溶けてるし、固まろうとしてるけど、渡れる温度では絶対ない。

そして看破していた俺は<ウィング>で空に舞い上がり

突風が吹いた。

「うあああっーーーー!?」

『風が我が身を運ぶ』の下りは要らない模様。突風に運ばれた。

ドカーン

「ぐはっ」

俺は左に生えてた木に激突した。

ゴールの木ではない。

結局、コースが走行不能だったので、引き分けになった。

「さすがですね、リーベルク様、アルネア様」

と、ジヨン

「いや、ジヨンもかなりの腕だな！あと、俺はリックと呼んでくれ
」！

「いやー、ジヨンの術にはビックリしたよ！俺はアルで！」

「リックさんも、アルさんも全然余裕ありそうですね……」

「おにいちゃん、そらとんでたよねっ！」

とりあえず即席呪文はよろしくない事は分かった。
空を飛ぶのは難しそうだなあ……

あ、ジヨンは村長さんの息子で、俺と同じ5歳（嘘だろ！？）である。
る。

え、俺は転生者だし？まさかジヨンもなのか……？いやでも……

「う〜ん」

「おにいちゃん、わたしもとびたい〜」

なんだと！？リリーが万一ケガでもしたら大変だ！

絶対に安全な呪文を考えねば！

「むう、じゃありりー、完成したら教えるよ」

「わーい！」

さて、そんなこんなで村長の家でご飯・・・（和食。おいしい）を
いただいていると・・・

「たいへんだ！村長！」

曰く、村の東、ティルグリム側から魔狼の群れが接近しているとの
こと。

数、とても多い。

でもまあ、向こうにとって不運なことに、こちらには父さん（紅蓮
の悪魔）がいる。

ん？なんかへんな気配がする。

村の東出口へ急行すると、魔狼と村人が戦っていた。

そして戦っていた村人の中の肉体派です！な感じの人が、こっちに
気づいた。

「村長！それに領主様！よくぞ来てくださいました！」

「カイト！大丈夫か！？今助けるぞ！」

そう言うと村長が魔力を集める！肉体派村人はカイトというらしい。

「よし、あとは私たちが引き受ける！村長の術に乗じて下がってくれ！まとめて焼く！」

どうやら父さんは焼く模様。

『大地の鉄壁、我が仲間を守護し、我らが敵を退けよ！くグランドウォール！』』

「グルルル・・・」

「ウガア・・・！」

魔狼たちが村人たちから離され、村人は全員退避する

その時

二回りも巨大な魔狼が現れた。

魔狼とは、魔法を使う狼という意味をもつ。

大きな力を持つ個体しか使えないのだが、この固体は相当強力そうだった。

俺は息を吐き、意識を集中

魔力を感じる。

とりあえずジョン、リリー、兄さん、村長、父さん、大魔狼（仮）の魔力を大まかに数値にする。戦力把握は戦いの基本さ！

ジョンを10とするとリリーは18。村長は20。兄さん40。父さん60。大魔狼250？。

自分はよくわかんないのでパス。これは・・・

・・・魔力だけじゃ勝負は決まらないけど、大魔狼（仮）やばいね。

「そんな・・・こいつは一体!？」

と、村長

「ほう……」

珍しく真面目なので、誰かと思うが父さんだ。

「兄さん、アレ、強いね」

「ん、そうだな。だが、俺もアルも父さんもいるんだぜ」

兄さんがニヤリと笑う

強いのは分かってるみたいだし、俺を不安にさせないようにしてくれてるのだろう。

「リック、全力で焼くぞ。アル、隙を見てアレを。リリー、おにいちゃんの応援な」

父さんもニヤリと笑う。

「おにいちゃん、おとうさん、がんばって〜！」

リリーはこんな時でも可愛かった。怖くないのだろうか？ま、父さんいるしね。

父さんが腰に差した剣を抜き、炎のような魔力が戦場に吹き荒れる！

「いくぞ、<ハマル>よ！」

『ふむ、久々の戦か、ほう、グレイフェンリルか。なかなかだな』

「うおっ！？アル、父さん！なんか声がするぞ！」

吹き荒れる烈火の如き魔力の奔流。父さんの魔力が4倍以上になる！兄さんが謎の声に慌ててるが、俺には余裕がなかった。

「これが、精霊・・・？」

そう、よく考えたら、十二貴族の父さんは精霊剣を持っている。

『アルベルク、お前の息子たちか。ほう、面白いな。』

「おい、ハマル、戦いが先だぞ」

大魔狼 改めグレイフェンリルは突如膨れ上がった父さんの、<ハマル>の魔力に警戒。

距離をはかっているようだ。好機！今のうちに詠唱を

『おろかな人間ども・・・そして<獄炎の精霊>か』

(グレーフェンリルがしゃべった！？)

「アル、リック。魔獣は強力な固体だと、意思の疎通ができる。住処に帰ってはもらえないかな！」

『ふん、断る。あの山にこれ以上いられないのでな。仲間の食料もたりぬ。力無きものが去るのが世界の定め』

「そうか、残念だ」

(・・・父さん、いつもこんならカツコイイのに)

フェンリルが魔力を集めだし、戦いが始まる

「<ハマル>！リック！一斉射撃だ！アル、時間差！」

意識を集中！<ハマル>の魔力が濃すぎてグレーフェンリルの魔法が感知しにくい。

空気、圧縮、風魔力　　！

「『冥府の業火は全てを焼き尽くす！敵を！罪を！汝を！眠れ、我に敵対せし者よ！

この炎、受けること叶わず！避けること叶わず！汝、生きることに叶わず！

<インフェルノ

ッ！！>『」

「燃やせ、滅ぼせ！烈火の炎よ！<ヴォルケイノ！>」

『大いなる風の力よ、集え！我に仇なすものどもを切り裂き、灰燼に帰せ！

虚空と烈風によりて、全てを退けよ！<オルトテンペスト・デイストラクション！>』

炎と風が激突し、音が消え、目の前が真っ白になった。

ドゴオオオオン！

（ 相殺した！今だ！ ）

「 空を切り裂く天の雷よ 我が手に集え！<サンダーボルト
！> 」

フェンリルに詠唱する時間はなかった。
しかし、フェンリルの体表に魔力が集まるのが見え

『 やるな、人間 』

（ サンダーボルトが当たって、ほぼ無傷！？ ）

『 ほう、魔力装甲か。やつかいだな？アルベルク 』

「 アルの電撃が効かないなんてなあ・・・父さん、どうする？ 」

「そうだな。直接くハマル>で切り裂くしかないか」

「父さん、だいじょうぶなの?」

グレーフェンリルはものすごく強そうである。

「なあに、お前たちの父さんだぞ?ただの魔狼は任せた!」

そう言って父さんがグレーフェンリルに突っ込む!

こちらの戦力は、俺、兄さん、父さん&精霊ハマル。
敵はグレーフェンリルと、魔狼が12頭。

「アル、右は任せろ!左のは任せろ!」

「オーケー、兄さん!」

魔力を集める!

魔狼6頭が、俺に向かってくる！

（ 慌てるな。接近されたら不利だけど、魔力量は勝ってる！ ）

「 乱れ飛ぶ雷の矢！ <ガトリング・サンダーアロー！> 」

ドガガガガガガ！

「 キャウウン！？ 」

<ガトリング・サンダーアロー>

とりあえず、接近させずに魔狼を殲滅する意図でとっさに作った雷魔法。

1秒に5発ほどの速さで雷の矢を撃ちまくる！

一発の威力は<サンダーボール>1.5個分。（俺主観）

消費魔力量が多い。サンダーボルトと同じくらい。

ちなみに、持続時間は約3秒で、計15発放たれる。

グレイフェンリルに向かって走りこみ、
「ハマル」で斬りつけ
る！

フェンリルは躲して爪で切り裂く！

後ろに跳んでかわし、魔力を集める！

「<ソニック・ブレード！>」

『<ソニック・クロー！>』

互いに放った真空波が激突、相殺する。

互いに相殺された技の余波をかくぐり、斬りつける！

「燃えろ、ハマル！>」

『小癩な、<風よ!>』

燃え盛る<ハマル>

風の爪が迎撃する

（ よし、魔狼殲滅！兄さんも大丈夫そう。父さんに加勢する！ ）

炎が閃き、風が切り裂く。

（ でも、とうてい割り込める状況じゃない・・・ ）

なら、離れたところを仕留める。

俺は魔力を手に集めようとして

違和感を感じた。

俺の体の奥に、膨大な魔力があった

フェンリルの爪をくハマル>で防いだ瞬間、膨大な魔力を突如感知した。

「 ツ！？<ハマル！>」

<ハマル>を魔力で爆発させ、距離をとる。

「 なんだ、これは！？」

フェンリルが焦ったように言う

「 フェンリルじゃない、まさか …！？」

「 アルベルク、あの少年は何者だ？」

膨大な魔力の中心、アルネアの眼は、いつもの緑ではなく、銀に輝いていた。

「 天をも切り裂く銀の雷 」

死を告げる轟音、聞くこと叶わず

汝を葬る雷、見ることも叶わない

其は天空の理。我が手に導かれ、裁きをもたらす

<サンダーボルト>

世界が銀の閃光に包まれた。

第3話・銀の雷（後書き）

そのうち、アルを学校に行かせたいなあ・・・なんて思っています。
このような作品を読んで下さった方、どうもありがとうございます。

第4話・これから

『 どうして助けたんですか 』

いつか聞いた声だ・・・誰だったか思い出せない。

コンコン

「おにいちゃん、おきてる〜?」

そう、もう朝だった

「おきてるぞー」

「はいつていい？」

「だめ」

「どっしてっ？」

「眠い。寝させて。」

ガチャ。タッタッタッ

「えいつ！」

「甘いつ！信頼と安心の布団ディフェンス！」

ギリギリ間に合った。

「むう、おにいちゃん！あそこはんは？」

「食べる！けどあと5分だけっ！」

「じゃあ、5分たったたらおきてくれる？」

「・・・むりかも」

リリーが布団をつかむ。

こうして今日も、俺は戦う。

「おにいちゃん、きょうのリリーはひとあじちがつわー！」

「ほっ、ならばその違いとやら、見せてみるー！」

「ひっさっしー！くるーりんぐ・ふとんはぎー！えいーっ！」

いつも単調に引つ張って来ていたリリーがひねりを加えている！

「さらにできるようになったな！リリー！　だがまだだなっ！」

「くうっ、おにいちゃんのみもりがくずせない！」

「これでも喰らえ！対リリー決戦魔法！」

「いたずら好きの風の妖精、汝を笑わせ、我も笑う！<シルフ・トリック！>」

「きゃっ、あはははははっ」

これが俺の新技！いたずら好きのシルフをイメージ。壮絶なくすぐり攻撃である！

え、弱そう？リリーにケガさせる訳にはいかないし、これでいいんだ！

それにたかがくすぐりと侮るなかれ。本気でやれば笑い死ぬレベル

までいける。

「みずのまにより……あはははははっ」

しかも詠唱妨害。集中できない。

5分後

「ああうあああ〜」

リリーに勝った！

「む、この魔力は……」

「アルー？リリー？」

「来たね……兄さん。」

「り、りりりー！！」

「リックおにいちゃん、アルおにいちゃんを・・・おこしてあげよう
はんに・・・ガクッ」

「そんな・・・アル、どうして・・・どうしてりりりをー！！」

「俺は・・・眠かった・・・あと5分、もう5分・・・」

「くそっ、今、俺がお前の目を覚ましてやるっ！！」

「紅蓮の炎よ！布団の中を暖める！<ファイヤー！>」

布団の中が温かく　！ん、なんの問題が？

兄さんがニヤリと笑った。

「あついつー！」

布団の中が暑すぎる！しかし外は寒い！
この程度で……！

「安らぎを運ぶ風、布団の温度を適温に！<エア・コンディショナ
ー！>」

「今だ！いくぜ、本家・リック爆弾！」

嘘だろっ！？体重、パワー共にリリーを大きく上回るリックが
跳ぶ！

防がねば！

「風の防壁、我を害するものを防げ！<エアシールド！>」

「風よ！防壁を崩せ！<そうくると思ったぜ的・アンチ・エアシールド！>」

ツ！？

なら！

「主を守る守護の風！<エアバッグ！>」

とっさに思いついたのがそれだった。

防御できて、ただの壁じゃなくて、安全なもの。壁じゃなければアンチシールドは効かない。

ポウン！

「ぐはぁッ！」

兄さんが吹き飛び、俺は勝利した。
エアバッグって凶器にもなるよね。

「勝利とて虚しい・・・」

とっさ使ったたけど、＜エア・コンディショナー＞に＜エアバッグ＞・・・
前世にあったのはイメージしやすいから使いやすいのだ・・・
ん、エアコン？

「むう・・・」

「安らぎを運ぶ風、この部屋を適温に！＜エア・コンディショナー＞」
「>」

「おお、あったかい」

便利だった。魔力をかなりつかうけども。

部屋が温かくなったので、布団から出る。

何の為に戦ってたんだっけ、俺・・・

「えっと、ごめんね。二人とも。」

「おにいちゃん・・・あしたはまけません」

「アル、今日は、お前の勝ちだ」

・・・明日が怖いな。

で、そのあと朝ごはんを食べてると・・・

ん？そういえば昨日・・・そう、昨日はグレーフェンリルと戦ったんじゃない？

なんで俺寝てたんだ？

父さんに聞いてみると。

「ああ、アルがすごい魔法を撃ったあと倒れてしまったから、とりあえずベッドに運んでおいた」

なんと、申し訳ないことをした。

「ごめんなさい、父さん……」

「いや、アルのおかげでグレーフェンリルを倒せたんだぞ？よくやったな、アル」

「そつだぞ、アル。すごかったぜーお前の魔法！兄さんも負けられん！」

「おにいちゃんかつこよかった！」

「お母さんも見たかったな……」

ご飯を食べ終わった俺は、自分の部屋で悩んでいた。

「むう、フェンリルに出会っても余裕で勝てるようになりたいな」

この世界にはフェンリルや魔狼だけでなく、ゴブリンやらオーガ、果てはドラゴンまでいるというのだから、何が起きてても大丈夫なようにせねば。

優しい家族を守れるようになりたい。

転生したからか、全般的に俺の能力は高いが
とりあえず空をとべるようにはなりたいと思う。

第4話：これから（後書き）

自分の書いた作品を、どこかの誰かが読んで下さっているというのは、とても嬉しいです。どうもありがとうございます！

このままだと、ただの朝が弱い主人公なので、もっと精進したいと思います。

そろそろ新キャラを出せたらいいな〜と思います。

第5話：飛行魔術、ティルグリムへ

グレーフェンリル襲撃から約1年2ヶ月。四月1日目。

朝だ。

戦いだ。

毎日、朝は戦いである。

「おにいちゃんっ、おきてっ!」

「だが断る!あと10分!」

「きのうおきなかったでしょ!」

「いたずら好きの風の妖精!<シルフ・トリック!>」

毎朝使ってたので、詠唱が短くなった。

「水よ、わたしをまもりたまえっ!<ウォーター・ベール!>」

リリーも対抗術を母さんに教わった。

「水よ、おにいちゃんに、さわやかなおめざめを！<フレッシュ・ウォーター！>」

「炎よ、我が安眠のために水を蒸発させよ！<アーム・スリーピー&ファイヤ！>」

イメージが大事なので術名はなんでもいい。
命がかかった戦闘は別だが。
最近はお互いに必殺技であるところの魔法が効かない。
ならどうなるか。

「うおおおおつ！<布団ディフェンス！>」

「えいつ！<おふとんがえしっ！>」

おふとんがえし

非力なリリーがアルの布団ディフェンスを破るために編み出した新
技。

ひっくり返すことで、布団ディフェンスを無効化する　！

アルの体が少し持ち上がる　！

「くうっ！」

「えいつく！」

力だけじゃ技には勝てない。

でも、この状態じゃ技は撃てない。

なら、もつと力を　！

魔力を流す　両腕、両足、腹筋！

毎朝の魔法を取り入れた格闘戦。
ある時俺は気づいた。魔力を流すことで、パワーを上げられる　！
フェンリルの魔力装甲も若干参考になっている。
シーツにしがみつく！

「うおおおおおお　ッ、全力、全開！」
「わたしだって　ッ！」

リリーの腕に魔力が流れる　！

「えいやっ！」

「なんだと!？」

俺は・・・宙を舞っていた。シートもろとも。

慌てず、空中で姿勢制御。もう慣れた。

「むう、今日も負けたか・・・」

5分以内に起きるかが勝敗のラインである。

「わーいー！かったー！これで、45しよう369はいただけど5れんしょう！」

魔力を流すと、身体を強化できるのだが、ある程度以上流すと、身体が薄く光る。

で、朝の戦いで適当に魔力を流したら、量が多くて、光ってリリーにばれた。

あと、リリーも魔力をなんとなく察知できるらしく、マネされてしまった。

で、体は強化できても、ベッドやシーツや布団は強化できないため、最近負けが増えて・・・ん？なんでベッドやシーツや布団は強化できないんだ？

できそうだな。

というか、この身体強化も詠唱したらもっと調整できるかも・・・

「おにーちゃん、あさごはんー！」

とりあえずご飯か。

さて、この一年2ヶ月で変わったのは三つ。まず、身体強化。もうひとつは、<治癒>もどき。こっちはリリーの術をパクった。でも、流石に特殊属性だけあって、かなり難しい。俺のは大量の魔力で無理やり治す感じである。

さて、突然だが、ティルグリム山脈に来た。

一人で来た。何故なら、ついに完成したから。三つ目はソレ。それと、なんか来たほうがいい気がしたから。

「我に風の翼を！風を操り、風を切り裂き、風に乗る！
天翔る翼をこの背に！<ウイング！>」

万全を期すために長めの詠唱。短い詠唱も創つてある。

なにかあつたら飛んで逃げられるので、ティルグリム山脈を探索する。

あと魔力感知も得意だから。大丈夫、問題ない。

「空が飛べる・・・もうなにも怖くない！」
がんばって練習したかいはあつた。

時速百キロ（俺主観）で山脈の空を翔ること30分。
山の高さに感心しつつ、魔力で心肺を強化しつつ進む。空気が薄い。
山脈の下のほうは森で覆われており、かなり深い。
上のほうは高山植物があるね。

そのとき、常に鍛えるようにしてきた自慢の？魔力探知に何か引っかけた。

（これは、魔力を隠してない！戦ってるのか！？）

現場に急行すると、白い小さなドラゴンが、デカイ黒ドラゴンに襲われていた。

黒いドラゴンの魔力は、尋常ではなかった。フェンリルの5、いや、10倍はある。

白いドラゴンは子どものようで、全身ボロボロだった。

どちらも飛んでいるが、黒のほうは速い！黒ドラゴンが爪を振るっ。

（なんでドラゴンがドラゴンを襲う!?!）

白いドラゴンが黒ドラの爪を避けきれず翼の端を割かれ、落下する

（わけがわからないけど・・・）

（黙って見てるのは、性に合わないんだよなあ・・・）

「 乱れ飛ぶ雷の矢！<ガトリング・サンダーアロー！>」

バチバチ

ドガガガガガ！

黒ドラゴンの脳天に15の雷が直撃する！

『 クハハハハ！我に挑むとはどのような者かと思ったが、とんだ羽虫だな！』

効いてない！それに、やっぱりしゃべるのか！

「おい、そこのお前！なんでその白いのを追い掛け回してるんだ！？」

黒ドラゴンがニヤリと笑った　　気がした。

『　クハハハ！貴様、我を知らんのか。愚かな奴め！まさか先ほどの魔術も挨拶ではなく攻撃だったのか？』

『我が名は<グリディア>、貴様も跡形もなく葬ってやろう！』

<グリディア>、ラーベルグ防衛戦の黒竜。10の精霊剣ですら、傷すらつけられなかったという、最強の竜。

いままでは本気ではなかったらしい、俺を絶望させるために、その魔力を解放する。

（　勝てない。フェンリルの100倍はあるんじゃないか？）

全力を開放すると、気絶する危険がある。

アイツのほうか、俺より速く飛べるだろう。

でも、見捨てる気はない。

だって、以前には無かった力を手に入れてしまったのだから。

（魔法はイメージで無限に変化する。勝率は0ではない！）

（だって、助ければ俺の勝ちなんだから）

魔力を集める。

グリディアも魔力を集める。

最上位火属性、範囲極大、威力は、<サンダーボルト（通常）>
>二十発以上と推定。

（ さっそく後悔したくなっただな！ ）

先手を打たなければ死ぬ！

「吹けよ神風！我を運べ！<ソニック・ウィンド>」

俺はヤツにダメージを与えられない。

俺もヤツもそれは解ってる。

故に、ヤツは油断し隙がある！

<ウイング>と<ソニック・ウインド>の重ねがけ

俺はヤツの顔に向けて急降下！

ヤツは俺が血迷ったと思い、笑う。

『我が竜炎は愚かな羽虫を焼き殺し、塵すら残さぬ無慈悲の炎

』

ヤツの詠唱開始を確認し、一気に加速！

『悔やめ、我に挑みし愚行を

』

詠唱を止めても、つかった魔力は帰ってこないため、

新しい術を出すくらいなら、そのまま撃つたほうがまし。

『くブラスト・ヘルフレア！』

よって、ヤツは大規模魔術をそのまま撃つしかないのだが、

俺はヤツの腹の下を潜り、間一髪回避する！

こんな大規模魔術では、流石のグリディアも無傷ではすまない。

自分に当たる場所には撃てない。

おとなしく俺を普通に殺せるだけの威力を撃てば、今ので殺せたのに。

しかも、この馬鹿でかい炎は、俺の役に立つ！

「乱れ飛ぶ水の弾丸！<ウォーターターゲット！>」

水の弾丸が竜の炎に当たるが、一瞬で蒸発していく。

『フハハハハ、何をしているのだ？愚か者が！』

この水の弾丸は大量に魔力をこめた特別製。

一斉に蒸発し、霧になる　　！

「炎に焼かれても消え去らぬ輪廻の理！集いし水の白幕は、

敵を欺き、惑わし、我を守る！汝、霧に囚われ惑う！<ミス

ト・プリズン！>」

一面、真っ白な霧に覆われた。

もともと、俺の魔法は白色なので、都合がいい。

（ 三十六計、逃げるにせず！ ）

全力で飛ぶ！目標は ！

『フハハハハ！その程度で逃げられると思うのか？』

『貴様の屑のような魔力が隠せていないぞ！』

『燃えろ！<ヘルフレア！>』

詠唱が短い！反則だろ！？

先ほどの半分程度の威力だが、それでもありえない魔力
！

竜炎が、霧の中を逃げる魔力を、焼き尽くした。

『ふん、邪魔な霧だ』

邪魔な羽虫を焼き殺したが、霧が消えていない。

おそらく、魔力を常時放出するのではなく、最初に一定量出していったのだろう。

魔力を限界まで抑えて逃げていたが、飛んでいる以上、魔力の跡は

残る。逃げられるはずがなかった。

『まあ、上手く魔力は抑えていたな、人間の子どもでは有りえないレベルだが、その程度だ。あの雷使いには遠く及ばん』

『風よ、霧を吹き飛ばせ<トルネイド>』

霧のなくなった空には、黒い竜以外、何もなかった。

『・・・フン、羽虫のせいで本来の獲物を見失ったか。』

『まあいい、もう長くはあるまい。魔力が感じられぬし、あるいは既に死んだかもしれぬな』

黒き竜は、ものすごい速さで東へ飛び去った。

第5話：飛行魔術、ティルグリムへ（後書き）

えーと、読んでいただき感涙の極みです！

アクセス数が一個増えるだけで幸せです！

気がつくともアルが布団に引きこもってますが、こんなんでいいんでしょうか……

本来は、黒じゃなくて赤いドラゴンが出てきてサクッと倒す予定でした。

なのに気がついたらこんなことに……

ううっ、自己満足になってないか不安……

第6話：復活の呪文

ティルグリム山脈。その西側にある、とある山の森に、それは倒れていた。

小さな白い竜。（まあ、人間と同じくらいの大きさはあるが）

「土、水、火、風！自然が我らの姿と魔力を隠蔽する！<マジック・ハイド！>」

『<ヘルフレア！>』

ひっかかった！

竜炎が、全く関係ない方向へ飛ぶ。
たしかに、その方向に魔力は感知できるだろうが。

やはり油断していたか。

先ほど俺は詠唱した。『水の白幕は、敵を欺き、惑わし、我を守る！』

それを聞いていればわかったはずなんだが。

今回はドラゴンからすると、俺の魔力なんて塵同然ということを利用した。

霧で感覚をかく乱しつつ、俺の魔力1割ほどを、俺と反対方向に逃がしてみた。

だって、塵の大きさなんて戦闘中に気にしないでしょ？

黒竜<グリディア>が飛び去ったのを確認して、白ドラゴンに駆け寄る

「おいつ、大丈夫か!？」

返答がない、かなり危ない!

死なせるもんか!

「癒しの魔力よ、この者を救いたまえ！<ヒール！>」

白ドラゴンの傷が治っていく。

だが

（くそっ、傷が深すぎる！）

（リリーならまだ助けられるかもしれないけど、絶対間に合わない
！）

もう<グリディア>はいない。

山には危険な生物など山ほどいるぞ？

ちゃんと姿も隠すように、さっきのハイドで指定した

助けて、逆に殺されるかもしれないぞ？

別にいいわ

魔力、全開！

この前は気づかなかったが、俺は銀の魔力を纏っていた。

「傷つきし者を癒す聖なる力」

「汝、未だ輪廻転生の刻にあらず」

「汝、未だ冥府の門を叩く刻にあらず」

「蘇りて、その天寿を全うせよ！」

「<リヴァイブ！>」

銀の閃光が閃き、白ドラゴンには傷ひとつなかった。

（ ツ!?! ）

一瞬、クラツと来た。一気に魔力を放出したのが原因のようだ。

（でも、この前よりましだ）

まあ、体はダルく、戦える状態ではないが、しばらくすればマシになるハズ。

97

何はともあれ、これで白ドラゴンは助かるハズだ。

と、白ドラゴンが目をあけた。

『 たすけてくれて、ありがとうございます。 』

いきなり回復したのと、俺が魔力を放つてることから、

俺が回復魔術を使ったのが分かったのだろう。

「うん、どういたしまして。大丈夫？痛いところはない？」

『はい、だいじょうぶです。』

「はあ、よかった」

命がけて特攻したかいがあった。

『どうして、たすけてくれたんですか？』

白いドラゴンに問いかけられる。

いつか聞いたような言葉

でも、違う

何が？

わからない。でも、

答えは、同じ。

「助けたかったから。」

白いドラゴンがこっちをみている。

擬音で表現すると、ポカーン……って感じだな。

まあ、こんなセリフを実際に聞くことなど皆無だろうっからな。

「あ、そうだ。助けたかっただけだから、全然気にしなくてオツケ
ーだよ?」

『……そんなことをいわれたら、よけいに気になります!』

むう、その通り。

なら

「なら、名前を覚えてほしいな。俺はアルネア、アルって呼んで」

『……なまえは、ないんです』

……なんか、複雑な事情を感じ取った。

「じゃあ、俺が名前をあげるよ」

『ほ、ほんとうですか?』

「おう！君の名前は エリシアだ！」

しばらくして

「炎よ！<ファイヤ！>」

「よしっ 焚き火オツケー！」

とりあえずご飯食べたいので、

「エリシアー、生肉と焼肉どっちがいい?」

『……やきにくがいいです。』

「おっけー、んじゃ、適当に棒に刺して、焼くつと」
こんなこともあるのかと、肉とか持参してあった。
魔法あるから火も起こせるし、日帰りだしね。

数分後

「よし、上手に焼けました！はい、エリシア」

「ありがとうございます」

肉つき棒を手渡す。

エリシアが手で受け取る

俺は空腹なので、とりあえず食べる。うまい。

ん、手で受け取った？

ちらっと右にいるはずのエリシアを見る

白い髪で、赤い目をした女の子がお肉を食べていた。

簡素な真っ白い服　　ほぼ、ただの布のままだが、かたちは普通の服　　を着ている。

「・・・えつと、エリシア？」

「はい、なんですか？」

女の子がこっちを向いて答える。

なんだと!？

「え〜と、おいしい？」

「はい、おいしいです。ありがとうございます」

「そっか、そっか、よかった〜」

とりあえず、色々考えたが、人間に変身できるようだ。

転生者だからまだ耐性があるが、実際に見ると、ほんとにビックリである。

そうこうしているうちに、二人とも食べ終わった。

とりあえず、一つだけエリシアに聞かねばなるまい。

「エリシア、一つだけ聞かせて」

「はい、なんですか？」

エリシアが小首をかしげる。

「どうして<グリディア>に襲われてたの？」

エリシアは少し悩んだようだったが、教えてくれた。

「わたしは、竜族でも強大な力をもって生まれたらしく、
<グリディア>は、わたしが成長するまえに、亡き者にしようとしたみたいです。」

そう言って、恐る恐るこちらの反応をつかがうエリシア。

「そっか、グリディアひどいなあ・・・エリシア、だいじょうぶなの？」

エリシアは上目遣いにこちらを見てくる。

「その、こわくないんですか？」

「え？なにが？」

「わたしは、あのグリディアと同じくらい強くなるかもしれないんですよ？」

今のうちになんとかしよう、とか思わないんですか？」

ふむ、それはたしかに。グリディアには到底勝てる気がしないな。

「そうだね、じゃあ今のうちに

エリシアと仲良くなっておこう！」

エリシアは呆然としている。そんなに変なこと言ったか？意外と合理的だともうんだが？

「わ、わたしが仲のいい人も攻撃するかもしれないですよ？」

「む、なら自分の敵になるかもしれない命の恩人も始末したほうがいいんじゃない？」

「そ、そんなことできません！」

「うん、なら何の問題もない。オールオツケー。」

よし、これにて万事解決。っと、さてよ？

「エリシア、このあたりにいると、危ないんじゃない？」

「そう、ですけど、でも・・・」

顔を俯けてしまう。やっぱりか。

グリディアに狙われる以上、テイルグリム山脈は危ない。

エリシアは魔力を大量に保有しているので、完全には隠しきれない。
まだ子どもみたいだしね？

今も、俺の感覚は十二貴族クラスの魔力を感知してる。

白い髪に、赤い目は目立つ。

行くあてもない。

「よし、エリシア。ウチにこない？」

「えっ!？」

第6話・復活の呪文（後書き）

こんな作品に6話も目を通してくださった方。ありがとうございます！

第7話：帰還

「エリシア、ウチに来ない？」

「えっ!？」

エリシアは何故か顔を真っ赤にして慌てている。

「そ、その、いいんですか？」

「もちろん！エリシアは悪い人・・・じゃなくて童じゃないし、困った時は助け合いだよ」

「・・・ありがとう、アルネアさん。よろしくおねがいします」

ぺこりと頭を下げるエリシア。
うん・・・

「エリシア、歳いくつ？」

女性に年齢を尋ねるのはご法度だが、年上に敬語を使われるのは何か嫌だし、年下なら6歳未満なので平気だろう。

「えっと、6歳です」

たしかに見た目6歳くらいだと思ったが、若いというか幼いのに礼儀がしっかりしてるな！

「よし、俺も6歳だから、お互い敬語はなし！アルってよんで！」

「は、はい。じゃなくて、うん？」

「あー、そのへんは好きでいいや」

「えと、じゃあ。アル、よろしくです？」

「うん、よろしく！」

さて、そうと決まったら帰ろう。

「あ、そうだ。エリシア、飛行魔法使える？」

「飛行魔法なら使えます。でも変身したほうが速いですよ？」

「いや、一応見られても大丈夫なようにね」

「あ、そうですね。でも、飛行魔法って相当難しくて、使える人はほとんどいないって聞いたんですけど・・・」

「え、そうなの？」
初耳である。

「はい、でもたしかにドラゴンより全然いいですね」

「・・・よし、行くうか」

「はい！」

「お空を自由に飛びたいな <ウイング！>」
「わたしに天を翔ける翼を！<ウイング！>」

バシユッ
バシユッ

さあ、帰ろう。俺はどこかで聞いたような呪文で飛ぶ。
エリシアは真面目な呪文だね。

およそ40分後（俺主観）

「よし、エリシア、着いたよ。ここが俺の家」

「お、おっきいですね。その、アルは貴族なんです？」

「ん？たぶん一応」

「見えないです・・・」

「……くはっ！」

「あ、そうじゃなくて、貴族の人に良いイメージがなかったんです」

「あー、なるほど。俺の家族はこんな感じだから大丈夫」

「そうなんですか？」

「よし、まあ一応エリシアがドラゴンってことも説明して大丈夫だろっ！」

「ほ、ほんとですか？」

「兄さんは論外だな。いい意味で。父さんは……シリアスモードじゃなきゃ平気。」

「リリーは……なんだ？やな予感がするが……。母さんはエリシアなら平気だな。」

「……いい意味で論外ってなんです？」

「会えば分かる！」

そんなわけで、とりあえず兄さんを味方につける。

「おーい、兄さーん！」

「アル、どうかしたのか？」

「実は虐待されてたドラゴンの女の子を拾ってきたんだ！名前はエリシア、人間に変身できる！」

「な、なんだと・・・！？」

なにやら怒りに震えるみたいな兄さん。

「えっと、アル、大丈夫なの？ほんとに？」

心配そうなエリシア。

「虐待なんてゆるせない！どこの誰だ！？」

エリシアは、ドラゴンとか、人間に変身はスルーなの！？って、顔をしている。

「大丈夫だよ兄さん！俺が片付けておいたから！エリシアをウチで保護するのに賛成してくれるよね！」

「おお！もちろんさ！」

おめでとうーリックがパーティに入ったぞ！

とりあえず、こっそりエリシアに話しかける。

「兄さんは良い人だから。いい意味で論外だったでしょ？」

「う、うん。そうかもです」

万全を期すべく、母さんの部屋へ。

コンコン

「お母さん、いる？」

「アル？どうかしたの？はいつていいわよ」

とりあえず3人で部屋に入る。

「あら？そちらの可愛い子はどつしたの？」

「は、はじめまして。エリシアです」

「あら、どうも。アルとリックの母のクリスです。よろしくね」

「はい、よろしくおねがいします」

「お母さん、実はエリシアはドラゴンなんだけど、大きなドラゴンにいじめられて、死に掛けてたんだ！

それで僕がケガを直してあげただけど、エリシアには行く場所がないんだ！

ウチで引き取ってあげてほしいんだ！」

「それは大変、うちでよかつたらいつまでもいていいわ！」

「あ、ありがとうございます」

「母さん、父さんの説得に行くんだけど、来てくれない・・・？」

「もちろん手伝うわ」

母さんが仲間になった！

「あなた、エリシアちゃんをひきとってあげたいの・・・」

「わかった。オツケー。」

（ はやっ！？ ）

まあ、なにはともあれ・・・

「よかったな、エリシア」

「うん、アル、ありがとう」

何はともあれ、エリシアは嬉しそうだった。
これにて一件落着！

だと思ってた。

問題は次の日の朝。

「うーん、アルが起きてこないわね・・・そうだ、エリシアちゃん、起こしてきてくれる？」

「はい、わかりました」

「えっ、わたしもおにいちゃんおこすっ」

「じゃあ、二人で起こしてきてくれる？アルはなかなか起きないから」

第7話：帰還（後書き）

こんな作品を読んでくださってありがとうございます！

えっと、ストックが尽きるまでは一日一回更新でいこう！と思ったんですが、

つい更新したくなって・・・こんな話でいいのかなあと思いつつ投稿させていただきました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2846y/>

銀雷の魔術師

2011年11月8日00時18分発行